

# 日本（ヤマト）からのアプローチ——中世における琉球文学の可能性——

渡辺 匡 一

はじめに

「何で沖繩の研究をしているのか」と、よく聞かれる。「『神道集』研究の一環として『琉球神道記』を読み出したのがきっかけで」と答えると、大抵の人は「ああ、それで」と納得した顔をする。しかし、それだけで研究が始められたわけではない。気候・言葉・信仰とあまりに異なる沖繩は、やはり遠い存在だった。沖繩の研究に自覚的に取り組むようになったのは、前任校に赴任してからである。前任校は福島県浜通りに所在していたが、すぐ北の町には原子力発電所があった。発電所は東京に電力を送り続け、各家庭には、毎年数千円の「危険手当」（命の値段）が振り込まれた。東京（日本）のためならば危険を厭わず尽くし続けなければならない「地方」を実感した時、初めて、基地問題に揺れる沖繩を身近に感じるようになったのである。

沖繩を同じ地方として意識した時によりやく研究を始めるように

なった。私にとって沖繩・琉球研究は、地域研究の一環であり、中央からのイデオロギーや文化と、地域固有の文化との間に生じる摩擦や歪みの中に、地域の固有性や尊厳を見出す試みである。

そうした目で琉球を見た時、中世後期から近世前期における琉球は、恰好の考察対象となる。中世後期には独立国であった琉球王国が、一六〇九年、島津氏の侵略に遭い、支配下におかれることになって、両国間に激しい文化摩擦が生じるからである。本稿では、島津氏の侵略・支配などによって顕在化する異文化間の衝突、摩擦の様相を、主に日本側から発せられた書物や言説から考察していくことにしよう。

## 一、ミニ「日本」袋中——権力者と関わる学僧——

琉球の神キンマモンなど、琉球での様々な体験を書き留めた『琉球神道記』（以後「神道記」と記す）は、島津氏侵略以前、まだ独立国であった琉球王国（古琉球）の状況を知りうる書物として評価さ

れてきた。

【神道記】の作者は、奥州岩城（福島県いわき市）の出身で、浄土宗名越派随一の学僧として名を馳せた袋中（良定一五五二—一六三九）である。慶長八年（一六〇三）、五十二歳の時に琉球に渡った袋中は、三年の滞在を経て帰洛、【神道記】を書き上げた。

袋中はいったいどんな目で琉球を見つめていたのか。袋中が琉球に持ち込んだ認識や尺度を考える際、「学僧」であつたことが注目される。「学僧」と聞くと、我々はつい社会から孤絶し、仏の教えをひたすらに追求している、といった高深なイメージを持ちがちであるが、「学僧」というのは、案内生々しかつたりするのである。

袋中は常に権力者に庇護されていた。故郷岩城では戦国大名岩城氏、琉球では尚寧王、琉球から帰洛した後は徳川氏の一族松平定勝が檀越として袋中を支えた。袋中には彼らとの深い関わりを窺わせる著作も多い。葬儀の仕方や戒名の付け方について記した「泥洹之道」（寛永九年以降）は、松平家の葬儀に関わつた際にしたためた書であり、「神道記」にしても、琉球王国の高官、馬幸明からの依頼で執筆したとされる（版本序）。

また、袋中は、琉球の宿敵、島津氏とも関わりがあつたことを確認できる。

又国ノ隻首、何事ゾヤ。諺云、昔他国ノ人来テ、此国ヲ治ム。国ニ鬼類多シ。両角ヲ戴。其人是ヲ打落ス。末ノ験トテ、隻角ヲ残也。後ニ八人問ト成ト雖、前ヲ恋テ、隻首ヲ学也。

（琉球神道記）

琉球の人々は鬼であつた昔を懐かしんで「隻首」にしている、

というこの説は、島津氏に仕えた五山僧、文之玄昌（一五五五—一六二〇）が琉球侵略（一六〇九）の際に作つた「討琉球詩並序」の一節に近似している。「討琉球詩並序」ではさらに文言が付加され、琉球は風俗も昔と変わらない未開の蛮国と貶められている。文之玄昌は、島津家久に仕え、幕府・朝廷とのパイプ役を担つた、臨濟宗東福寺派の五山僧である。琉球の人々が鬼の子孫であるとの説は、九州の五山僧の間で広まっていたものと思われるが（後述）、【神道記】の隻首にまつわる説は、島津氏に仕え、幕府・朝廷とも繋がりを持つ五山僧と、権力者とともに歩む浄土宗名越派の学僧との間に何らかの関係があつたことを伝えている。

学僧が権力（者）とともに歩むことは、仏教が日本へ将来されてからの基本的な考え方である。「仏法・王法相依」の体現に他ならない。仏法と王法によって日本という国を支えていく、その思想の構築・習得こそが学僧の役割なのである。王権とつながる「日本紀」の注釈活動や両部神道書を手がけたのが学僧たちであつたことを思い浮かべてみればよい。袋中にも「日本紀」や「麗氣記」などの知識があつたことは、すでに確認されている。袋中は島津氏に先んじ、ミニ日本として琉球に足を踏み入れ、学僧の目でもって琉球を見つめていくのである。

そう考えてみると、「神道記」で開陳される、琉球王国の濫觴譚も気になってくる。

昔此国初、未タ人アラサル時、天ヨリ男女二人下リシ。男ヲシネリキユト。女ヲアマミキユト云。二人舍ヲ並テ居ス。此時此嶋、尚小ニシテ、波ニ漂ナリ。而ニタシカト云木ヲ現シテ、殖

テ山ノ体トス。次ニ、シキユト云草ヲ殖。又、阿檀ト云樹ヲ殖  
テ、漸ク国ノ体トス。二人、陰陽和合ハ無レトモ、居所並カハ  
ニ、往來ノ風ヲ賦シテ女胎ム。遂ニ三子ヲ生ス。一リハ所ノ  
主ノ始ナリ。二人ハ祝ノ始。三リハ土民ノ始。

【神道記】では、琉球はシネリキユとアマミキユの男女二神によ  
つて始まつたと記されている。我々は「ああ、琉球も日本のイザナ  
ギ・イザナミと同じような国生み神話を持つているんだな」と思っ  
てしまふ。しかし、沖繩・琉球の諸書では、琉球の始まりや、稲や  
神、粟などの五穀をもたらしたのは、アマミキユ（アマミク）一神  
であることが圧倒的に多いのである。琉球王国初の歴史書「中山世  
鑑」も、「神道記」を下敷きにしなが、アマミクしか登場させな  
い（五穀をもたらした話は追加している）。袋中が何をもとにして書き  
上げていったのかはわからないが、「神道記」の濫觴譚が「日本紀」  
の性格を強く滲ませていることは明らかである。袋中は、異国の文  
化との摩擦などまつたく感じないままに、自国の歴史、「日本紀」  
をもつて琉球を理解しようとしたのである。

## 二、仏者袋中——仏教の普遍的世界観と琉球——

袋中は、学僧（日本）として楽々と琉球を踏み越えていくように  
見えるが、琉球の守護神キンマモンには度肝を抜かれたらしい。首  
里城を始め岳々浦々の御嶽に現れて託宣を垂れるキンマモンと、  
王・后を始め平身低頭して拝む人々の姿は、今まで見たこともない  
風景だったからである。

古今ノ事、神託ニ明カナリ。若、神慮噴給フ時ハ、諸人、腕  
折・爪折シテ、是ヲ拜シ、慰メ上ル。国ノ風トシテ岳々浦々ノ  
大石大樹、皆御神ニ崇ル。然シテ、拜ミ貴則ンバ験アリ矣。

（キンマモン事）

袋中をさらに動揺させたのは、キンマモンが蛇神（「蛇蛇」「天  
竜・地龍」）だったことである。袋中の属する浄土宗は神祇不拜が基  
本である。伊勢・八幡・熊野などは仏菩薩が姿を変えた権者神とし  
て拜んでもよいが、死霊や畜生神、とりわけ蛇神は「もし拜めば五  
百生の間、蛇身の悪報を受ける」、悪神中の悪神である実者神とさ  
れていた（権者・実者神之事）「キンマモン事」。

琉球の神キンマモンは袋中にとつては、もつとも忌むべき神だつ  
た。しかし、この世の中で仏土でないところなどありはしない。な  
らばキンマモンが仏菩薩の化身、権者神でないわけがない、という  
覚悟のもと、「日本の僧侶」袋中は、蛇神（実者神）キンマモンを仏  
菩薩の化身（権者神）へと転換させようと格闘を試みる。

【神道記】の序において、琉球を「南閩浮提陽谷、輪王所下ノ」  
にある仏土と規定した袋中は、巻一では「俱舍論」などを用いて世  
界の始まりを説き起こし、巻二では、天竺に釈迦が現れ仏教が広ま  
ったこと、巻三では、仏教がさらに中国へ伝えられたことを述べた  
上で、巻四では、琉球王国に存在する寺院の名を列挙する。この構  
成は、日本への仏教伝来をモデルにして、天竺に始まった仏教が、  
中国を経て、確かに琉球の地へと定着したことを明らかにするため  
に用いられたものである。もちろん、現在に至るまで沖繩に仏教が  
定着したことはないから、この構成は袋中の作為といつてよい。

琉球を仏教国に仕立て上げた袋中は、巻五でいよいよ仕上げにかかる。波上権現など、日本から渡来した七社の神が国家鎮護の権者神であることを述べた後、自問自答しながら、琉球の国を守る蛇神キンマモンを権者神へと転換させようと試みるのである。

問、此国ノ諸神、権者カ実者カ。答フ、七社ハ権ナルコト前ノ如シ。而シテキンマモンハ分別有ヘシ。私推スルニ権神ナルヘシ。国ニ災害ナシ。小嶋タリトイヘ共、諸蕃ノ手ニ入ズ。

袋中は「琉球の諸神は権者神なのか実者神なのか」との問いかけに、日本から渡来した七社の神と同様、キンマモンも「災害もなく、諸外国に侵略されもしない」国家鎮護の特性ゆえに権者神と断定する。ここで、袋中の狙いは達成したかに見えるのだが、何故か問答は続いていく。キンマモンが蛇形であることを問題とし、「蛇神であるならば実者ではないのか」、「実者の中にも権者がいるというならばその証文はあるのか」、「実者の龍は、すべて仏法の傷害となるのか」と繰り返される問いかけに自ら窮していった袋中は、「今時ノ蝙蝠ノ沙門、縦ヒ実業也トモ軽スヘカラス。徳光論師ヲ鑑ヘシ、浅学の学僧は、龍（蛇）が、たとえ実者であるからといっても軽んじてはならない。学識ある高德の学僧を見習うべきである、いつてついに話を打ち切ってしまうのである。自らが納得するまで議論を続けていく袋中の姿には、学僧としての自負が見え隠れするが、蛇神であるキンマモンを権者へと転換させるのは、やはり至難の業だったのである。それでも「国家守護の神」という唯一の切り札をもって、実者を権者へと切り替えるべく果敢に挑んでいく袋中の姿には、いかなる土地でも仏土に他ならないという学僧の強い信念と

ともに、どうしようもなく日本とは違う琉球の信仰が浮き彫りにされる。袋中の格闘は、日本と琉球の文化との間に起きた激しい摩擦とも言うべきものであった。<sup>8)</sup>

袋中には、「神道記」とは別に、「琉球往来」という著作があるが、「神道記」以上に研究が進展していない。「往来」という名の通り、様々な書簡を集めたもので、前半は貿易に関する記事、後半は日本の文芸について記されている。袋中が琉球に滞琉中の情報伝えられているといわれており、研究の進展いかんによって、中世における新たな琉球像を見いだせる可能性を秘めている。<sup>9)</sup>

### 三、「知のせめぎ合い——為朝渡琉譚をめぐる——」

本章では、琉球王国が独立した王国として存在していた中世後期から、島津氏侵略を経て、ある程度の落ち着きを取り戻す近世前期の間に、ことあるごとに浮上する「為朝渡琉譚」を通じて、日本と琉球のせめぎ合いを見ていくことにしよう。

「為朝渡琉譚」とは、保元の乱で大島に流された源為朝が琉球へと渡り、琉球国を開いたとか、あるいはその子舜天が琉球王国初代の王であるという話であり、明治十二年の、いわゆる琉球処分の際にも、沖繩が日本の領土であることの証拠として持ち出された。

「為朝渡琉譚」のもっとも早い例は、「幻雲文集」に見ることができ。寧波の乱（一五三三年）によつて明との関係が悪化した室町幕府は、琉球王国に仲介を頼む。明や琉球王国との応対に奔走していた月舟寿桂のもとに、琉球の五山僧、鶴翁智仙から今まで聞いた

こともない情報もたらされたのである。

吾国有一小説。相伝曰。源義朝舍弟鎮西八郎為朝。膂力絶人。挽弓則挽強。其箭長而大。森々如矛。見之勇氣沸騰。懦夫又立。嘗與平清盛有隙。雖有保元功勳。一旦党信頼。其名入叛臣伝。人皆惜焉。然而竄謫海外。走赴琉球。驅役鬼神。為創業主。厥孫世々出于源氏。為吾付庸也。與一統志所載不同。將信耶。將不信耶。

(幻雲文集)

情報の内容は、保元の乱で流刑となつた為朝が琉球に渡り、鬼神を驅逐して国を開いたのであるから、琉球王国は日本の属国である、というものである。「大明一統志」にも記されていない琉球の歴史を知らされた月舟寿桂は、当惑するばかりであつた。結局この説は取り上げられることなく終わる。当時の幕府にとつて、琉球王国は、明の怒りを宥めるために欠くことのできないパートナーであり、対琉交渉に必要とはされなかつたのである。<sup>11)</sup>

「為朝渡琉譚」が再び姿を現すのは、島津氏侵略前後である。前述した文之玄昌の詩や『神道記』の他、文禄・慶長の役で朝鮮との交渉を担当した五山僧、玄蘇景轍の「八嶋之記」にも「源為朝九州に御座候時相渡、彼国王の聲に成、子孫有之。阿多の平権守と申家人残り、其子孫此嶋に今に在之」と、為朝が琉球国の王の婿となつたという説が伝えられている。村井章介は「為朝路渡琉譚」が五山の僧侶のネットワーク上に流通していたのではないかと推測している。<sup>12)</sup>

しかし、「為朝渡琉譚」は、島津氏が琉球に侵攻する際にも、琉球支配の正当性を保証する説としては用いられなかつた。島津氏が

利用したのは、嘉吉元年（一四四二）に、島津忠国が大覚寺義昭を追討した際に、足利義教から琉球を拝領したとする「嘉吉付庸説」<sup>13)</sup>だったが、侵略の正当性を主張するためではなく、琉球の野蛮さを利用したためであつた。

「為朝渡琉譚」を積極的に活用したのは、むしろ琉球側であつた。それも、島津氏に侵略され、支配下に置かれていの中で使われたのである。ならば、もうすっかり日本の力に屈してしまい、恭順の意を示すために用いたのかという点と、どうもそうではないらしい。「為朝渡琉譚」をもって島津氏（幕府）に対して仕掛けたのは、琉球王国の摂政、羽地朝秀（向象賢）である。

島津氏の侵略以後、政治的にも経済的にも疲弊しきつていた琉球王国を立て直すため、三度に渡つて薩摩藩に出張した羽地は、薩摩藩の支持を後ろ盾に、王国の綱紀爾正・虚礼廢止・行政区分の再編などに辣腕をふるつた。羽地は、「為朝によつてこの国は始まつたのだから、日本と琉球は同じ祖先を持つ」（『羽地仕置』）という「日琉同祖論」の提唱者としても知られている。しかし高良倉吉によれば、この政令の目的は、国王の久高島参拝など、国費の浪費を軽減するために出されたものであり、したたかな政治家であつた羽地は、琉球が日本と同祖であると言ふことによつて日本の権威を楯にとり、政令を断行しようとしたのだと喝破している。<sup>14)</sup>

羽地は、琉球王国初の歴史書「中山世鑑」でも「為朝渡琉譚」を用い、琉球王国最初の人王である舜天を、為朝と大里按司の娘との間にできた子どもとであると述べている。しかし羽地のことである。

「中山世鑑」の「為朝渡琉譚」にも、何かしらの意図を酌み取る必要があるだろう。

「中山世鑑」を読み進めていくと、琉球における王統のあり方は、日本の天皇に対するものとは全く違う認識であることに気がつく。第一に、舜天の王統はわずか三代で途絶えてしまうこと、第二に、舜天以降の王統には血縁関係がないこと、第三に、王統の交代は王の徳によって行われる、などといったことが挙げられる。琉球の王統は、中国と同様、徳治の思想で貫かれているのである。したがって、「中山世鑑」においては、琉球の五つの王統の内、どの王統がより正統であるかといったことは問題にならず、たとえ舜天が最初の王であっても、日本が琉球を支配する正当性は保証されないということになる。さらに言えば、どの王統も、舜天の王統に劣ったものではないということにもなる。

羽地は厳しい現実の中で、自国のアイデンティティを失うことなく、ギリギリの緊張関係のなかで、したたかに、日本に向かって仕掛けていくのではないか。国や中央から半ば強制的に求められていく文化・価値観と、それに対抗する可能性を羽地の中に見出した、というのが私の願いでもある。

#### 四、日本から見る琉球の同一化、内在化された琉球

羽地によって紐解かれた琉球の歴史は、「中山世鑑」をもとに著された「中山伝信録」などによって日本でも知られるところとなる。しかし、羽地の思いとは裏腹に、「徳治」の思想により王統を解す

るといふ琉球の独自性は顧みられることなく、「血縁」により王統を認知するという、日本の認識の内に呑み込まれていく。琉球王国が、日本に隷属する証として、ついに、「為朝渡琉譚」が使われる時が来たのである。

徳川家宣・家継のもとで、国内外の支配秩序の再編を目論んでいた新井白石は、『琉球国事略』において、足利氏の祖である源義兼が為朝の子であったとの説を引き、「もししからば、彼国王は本朝の足利・細川・畠山等の流の諸家の源氏と同じく為朝の後と見えたり」<sup>17</sup>、そうであるならば、彼の国王舜天は、足利・細川・畠山等と同系の源氏であると述べる。舜天の体流れる「血」が日本の統治者である足利氏と同じとされることによって、琉球王国における舜天王統の正当性が高まることになる。

そして、白石の意図をさらに推し進める作品が登場する。『榕説弓張月』である。最終回において、舜天は生まれ変わって足利尊氏となり、日本を治めることになる。琉球王国の最初の人王は、日本の將軍だったのである。『弓張月』の空前の大ヒットは、琉球王国における源氏、幕府の支配の正当性を、広く日本国内に浸透させる結果となった。「其国初、天孫氏にひらけて八郎御曹司「為朝は、御裔なるうへは、吾皇国の属国なることいふも更なるを……」<sup>18</sup>（琉球人行列図）や『琉球奇譚』といった、いわゆる琉球物にも、その影響を見ることができるといえる。日本の圧倒的優位という力関係の中で、琉球が仕掛けた差異は顧みられることなかった。もちろん摩擦もせめぎ合いが起きることもなく、琉球は日本に呑み込まれてしまったのである。

おわりに

日本の圧倒的優位という力関係の内では、もはや琉球王国が、実態としての異国として認識されず、日本に同一化、内面化されてしまふという状況は、すでに白石の言辞からも窺うことができるが、このことは、日本において、実態とはかけ離れ、肥大化した幻想の琉球を生み出していくことになる。その顕著な例として、今後、研究が進んでいくであろう二作品に注目したい。「薩琉軍記」、「定西法師伝」は、どちらも伝本研究が始まったばかりという状況であるが、文化摩擦といった問題とは別に、日本における異国幻想の問題として注目される。

〈注〉

- (1) 拙稿「袋中の本箱」(『説話文学研究』38 二〇〇四年六月)
- (2) 馬公明の依頼によるとの文言は袋中の自筆本にはないため、真偽の程は明らかではない。
- (3) 以後、「神道記」の本文は、「琉球神道記」(角川書店)から引用する。
- (4) 「南甬文集」所収。
- (5) 島津侵略前後の経緯については、村井章介「15-17世紀の日琉関係と五山僧」(『東アジア往還』一九九五年三月 朝日新聞社)、紙屋敦之「薩藩制国家の琉球支配」(『枕倉書房』一九九〇年)、東恩納寛惇「琉球史料叢書」五解題(井上書房 一九六二年)、拙稿「為朝渡琉譚のゆくえ」(『日本文学』50 二〇〇一年一月 日本文学協会)、同「日琉往還」(『国

文学解釈と教材の研究」(46, 10 二〇〇一年八月 学燈社)などを参照。

- (6) 拙稿「蛇神キンマモン」(『文学』九卷三号 一九九八年 岩波書店)、原克昭「琉球神道記」試探(『説話文学研究』38 二〇〇四年六月)
- (7) アマミクが五殺をもたらした話は、「琉球国由来記」、「琉球国旧記」、「遺老説伝」などにも見られる。
- (8) 小峯和明「琉球神道記の説話世界」(『国文学研究資料館公開講演会』一九九七年十二月六日)、真喜志瑤子「琉球神道記—キンマモンと外来の神仏」(『岩波講座日本文学』三一九九四年)、前掲注6拙稿。
- (9) 小峯和明「袋中上人フォーラム」実施報告書(二〇〇五年三月 首里城公園友の会)
- (10) 「群書類從」
- (11) 前掲注5村井論文、拙稿
- (12) 「慶長見聞録案紙」慶長十四年二月(内閣文庫所蔵史料叢刊)
- (13) 「八嶋之記」、文之玄昌「討琉球詩並序」では、為朝が琉球へ行ったのは鎮西にいた時のこととされる。
- (14) 村井章介「中世日朝交渉のなかの漢詩」(『東アジア往還』一九九五年 朝日新聞社)
- (15) 前掲注6村井論文
- (16) 高良倉吉「改革者の心意気」(『日琉同祖論のねらい』)「おきなわ歴史物語」ひるぎ社 一九九七年
- (17) 「新井白石全集」三
- (18) 「江戸期琉球物資料総覧」二
- (19) 小峯和明「琉球文学と琉球をめぐる文学——東アジアの漢文説話・侵略文学——」(『日本文学』53 二〇〇四年四月)